# 学級経営・実践研究法キャリアアップフィールド

# 問題解決型の道徳教育の理論と実際

学校教育専修　　柳　沼　良　太

## はじめに

本コースは，実際の学校現場で起きている様々な道徳問題に対応するために，研修教員の指導力を高めると共に，問題解決型の道徳授業を開発・実践することを目指して設置された。本年度も，昨年と同様，小学校教諭７名と中学校教諭１名の合計８名がそれぞれ道徳教育に関する問題意識を抱えて積極的に研修に取り組んだ。本コースの実施方法は，基本的には昨年度と同様であるため，詳細は本誌の第１号を参照していただくこととし，本年度の報告では実際の指導における具体的な事例を取り上げながら，研修教員の生涯発達や振り返りと関連づけて論述したい。

## １．実施状況

本コースでは，文科省の推奨する『心のノート』やカウンセリング・スキルを活用し，問題解決学習やモラルジレンマ授業やエンカウンター授業をふまえて，研修教員が主体的に独自の道徳授業を構想し実践できるように支援した。特に，研修教員が子ども１人ひとりの発達状況や心情を適切に理解できるようにするため，アンケート調査，ポートフォリオ，心理テスト，ワークシート，道徳ノートの活用を推奨した。また，道徳授業を単なる机上の空論としないために，１回の道徳授業だけでなく日常の道徳的実践とも結びつけて，事前調査や事後指導や評価も充実させるように指導した。

既に12年の教歴をもつ研修教員は，これまで学校現場において様々な子どもの道徳的問題に直面し，それらを解決または解消するための道徳教育を実践してきている。そうした教員自身の経験を振り返ると共に，多種多様な道徳授業の事例を参照しながら，新しい道徳教育の理論や技法を体得できるように支援した。

### (a)　１回目の研修日

まず研修教員は８月３日に１回目の研修を受け，問題解決型の道徳授業の理論と実践例を理解した後で，それぞれの抱負や構想を発表した。昨年度はテキストがなかったために理論や方法論の説明が不十分であった反省から，本年度はテキストと資料を研修予算で用意し，１回目の研修で研修教員に配布し，初日で要点だけ集中的に効率よく説明するように努めた。また，口頭による説明だけでなく，ホワイトボードや実演によって解説したり，相互の話し合いや質疑応答の機会を作ったりすることで，相互研修を活性化するように工夫した。なお，道徳授業に関する説明が足りない場合は，各自がテキストを読むことで補足することとし，それでも理解できない場合

は，直接講師へメールか電話で連絡し個別に対応することにした。

(b) 自宅研修とレポート提出

この後，研修教員は自宅研修に入り，3週間後（8月27日）までに独自の道徳授業の指導案とワークシートなどを作成して担当講師へeメールで提出することとし，それに対する講師からのフィードバックを受けて修正することにした。レポート提出は7名が期日までに行い，1名は1週間ほど遅れて提出した。研修教員は一人当たり平均2，3度メールを講師と交換しながら指導案の修正・改良に努めた。問題解決型の道徳授業の作成に関して6名は特に支障なく最初から優れたレポートを提出し，2度のメールのやり取りで指導案を適切に仕上げることができたが，2名は基礎理解ができていなかったため数度のメールのやり取りが続いた。

また，本年度は担当講師である筆者が研修教員の自宅研修中に別の免許法認定講座を受け持っていたため，この自宅研修期間中は多忙を極め，何名かの研修教員に対するメールの返信が数日遅れたケースもあった。講師による指導案へのフィードバックは迅速かつ正確に行うことが効果的なだけに，誠に遺憾に思うと共に今後の反省材料としたい。

以下では研修教員のレポート報告と講師の対応を簡潔に示しておきたい。

T教諭

T教諭は「だれのをさきにしようかな」という小学1年生用の資料を用いて，公平・公正について考える道徳授業を構成した。まず導入で『心のノート』を参考にしながら，「アメをもっていたら，こうじ君とゆうや君にほしいと頼まれたので，仲のいいこうじくんにだけ分けてあげた」という問題を提示した。この発問は状況把握が難しいため，「こうじ君とゆうや君のどちらが先に頼んだのか」「主人公とこうじ君やゆうや君との仲はどうなのか」「アメは何個あるのか」などを具体的に設定し直すことにした。展開の前段では，登場人物の心情を理解した後に，仕立屋が「だれのを先に作るか」を尋ねてその理由を問うことにした。ここでは「そうしたらどうなるか」と結果を考え，「自分がそうされてもいいか」と他者理解を促すことで公平・公正について考えを深めるように修正した。後段では，問題文と同じテーマをもつ内容の道徳問題を提示するために，普段の生活から事例を出して，ねらいとする公平・公正の価値と関連づけた。終末では，「みんな等しく付き合い，順番を守る」ことを説話することにした。その後，この道徳目標を一週間ほどクラスで実践して，どれだけ実行できたかを事後指導で発表し評価することにした。

M教諭

M教諭は「うんどうぐつ」という1年生用の資料を用いて，勇気について考える道徳授業を構想した。M教諭は初め「靴を隠したしげた君はどのような子か」を明確化することに執着したが，登場人物の力関係を確認するだけではねらいとする価値に繋がらないため，「しげた君がはやし君の靴を隠したことを知った後，どうすればよいか」をメインテーマとするように設定し直した。この解決策として，1「一緒に靴を探す」，2「先生に相談する」，3「しげたくんに靴を出してあげてという」，4「知らんぷりする」，5「何もしない」，6「その他」を挙げて比較検討するように設定した。M教諭は最善の解決策を3の改良形で「靴を出してあげてと優しくいう」

ことにしたが，講師から「やさしく言っても，しげた君がきいてくれない時どうするか」と尋ねられた。そこで，「はやし君の気持ちを考えさせる」「もっと強く言う」「先生に相談する」を組み合わせた解決策に設定し直した。展開後段では，展開前段の「うんどうぐつ」と同様の問題意識で「ブランコ遊びへの割り込み」と関連づけて話し合い，終末で勇気をもって正しいことを行うことの大切さについて考えを深めるようにした。授業の最初と最後で「勇気」に関する考えにどのような変化が現れるかに注目することにした。また，その後の一週間で「勇気をもって何か正しいことができたか」を話し合うことにした。

Ｉ教諭

Ｉ教諭は「へその緒」という中学３年生用の資料を用いて，生命尊重をテーマにした道徳授業を構成した。Ｉ教諭は初め膨大な資料をそのまま授業で活用する予定だったが，読み込みに時間がかかり過ぎるため，資料の前半を大幅に削減して議論する時間を確保するように設定し直した。導入では，『心のノート』を利用して「生命のかけがえのない尊さ」を考えることにした。展開前段では，いじめにあった明子とクラスメイトの関係を修復するために何ができるかを考えるために，「あなたが明子なら，どうすることができるか」と「あなたがクラスメイトなら，明子のためにどうすることができるか」を尋ねることにした。明子の立場では，もっと協調性をもって友達と付き合うことを考え，クラスメイトの立場では，気軽に悪口を言って傷つけたことを反省し，適切な謝罪ができるようにした。展開後段では，資料の後半を読み，「自殺を考えた明子がへその緒を見ながら，人生を前向きに生きるためにどうすればよいか」をじっくり全員で考えることにした。終末では，「保護者からの手紙」を用意して「自らの生命の尊さ」を深く考えることとした。導入と終末で生命尊重に関する意識がどのように変化するかをワークシートで確認して評価に繋げることにした。

ＯＫ教諭

ＯＫ教諭は「水飲み場」という小学３年生用の資料を用いて，約束や社会の決まりについて考える道徳授業を構想した。導入では，『心のノート』を活用しながら「皆で使う場所はどうすればよいか」を問いかけ，約束や決まりの大切さを話し合うことにした。次に，展開前段では資料を読んで，水飲み場が汚いことを確認したよしお君とひろ子さんがどうすればよいかを考えることにした。解決策としては，１「何もせずに教室にもどる」，２「ごみをとってきれいにする」，３「誰がやったか聞く」，４「その他」を設定して，その理由と結果を尋ねることにした。ここでＯＫ教諭は初め「誰が悪いか（犯人か）」「何が原因か」を深く追及しようと設定したが，それよりも「どうすれば解決できるか」を考えることに時間を費やすように設定し直した。次に，「どの解決策がもっともよいか」を検討し，１「何もしない」や ２「だれがやったか」よりも，３「自分でごみをとってきれいにする」方が，自分も他人も幸せになることに気づかせるようにした。展開後段では，資料から離れて日常生活において「みんながクラスで気持ちよく過ごせるようにするためには，どうすればよいか」と問いかけ，それを子ども同士で提案しあった後に，それを実践してみることにした。終末では約束や決まりについてどれほど認識が深まったかを確認し，その後に「規則を守り公共の場を美化する」を週間目標として設定して評価することにした。

ＨＹ教諭

ＨＹ教諭は「学級文庫」という小学５年生用の資料を用いて，権利と義務について考える道徳授業を構想した。この授業でＨＹ教諭は，子どもたちが権利（欲求）を主張するだけでなく，それに伴う義務も考えられるようにしたいと考えた。導入では，権利と義務について簡単な説明し，その具体例を『心のノート』を使って示した。展開前段は，問題場面まで読んだ後に，ＨＹ教諭は信夫の立場を考えることにしたが，それでは一面的な解釈になってしまうため，信夫の立場と明子の立場とを両方考えて争いを解決できるように設定し直した。男女それぞれの立場を深く理解するために，信夫と明子の立場で役割演技（ロールプレイング）をし，その後に役割交換（ロールチェンジ）をする方法も取り入れることにした。その後，どのような解決策が最もよいかを考え，「自分がそう言われてもいいか」「誰に対してもそう言うのか」などとたずねて価値判断を促すことにした。終末では，「権利を主張する場合は義務もしっかり果たす」ことを再確認し，それを週間目標と設定して評価し事後指導を行うことにした。

ＨＴ教諭

ＨＴ教諭は「エジソンとえいじ」という小学校４年生の資料を用いて，努力について考える道徳授業を構想した。導入では，「何時間でも夢中になってやれることってなんだろう」と尋ね，多くの事例を出させることにした。次に，「楽しいゲームで何時間でも夢中になって遊びたいけど宿題もある時，どうすればよいだろう」と尋ね，道徳的問題の判断を促すことにした。展開前段では，資料に登場するえいじの怠惰な態度に注目して，「えいじ君のどこが困ったところなのか」と尋ねることにした。ただ，これだけでは問題解決に繋がらないため，「えいじくんはどうすればいいだろう」とも尋ねることに修正した。また，その予想される回答としては，１「改造だけする」，２「宿題をすませてから改造する」，３「夕ご飯を食べてから改造する」，４「その他」を設定した。その後で，「どれが一番いいかな」と尋ね，「その理由は何ですか」「その結果どうなるかな」とも聞くことに修正した。展開後段では，「自分の生活で，えいじくんのようなところはどんなところだろう」「エジソンのようになるためにはどうしたらいいだろう」という問いにじっくり取り組むことにした。終末では，実際に「やるべきこと（宿題）をやってから，やりたいこと（遊び）をする」という道徳的価値観を説話し，それを週間目標として設定して，どれほどできたかを事後指導で確認し評価することにした。

Ｋ教諭

Ｋ教諭は「友の肖像画」という資料を用いて，「真の友情」を考える道徳授業を構想した。事前に子どもたちの友情に関する意識調査をアンケート形式で行い，また友人関係について実態調査も行った。導入では，「どんなときに友情を感じるか」「真の友情とは何か」を話し合うことにした。初め，Ｋ教諭は資料を最後まで読んだ後で各場面の話し合いに入ることを予定していたが，物語の結末が分かってしまうと話し合いにくい話題であったため，資料を前半と後半に分割して話し合うように修正した。展開前段では，資料の前半を読み，転校した友達の正一に手紙を出しても返信が来なくなったことを知った時，「もし自分だったらどうしただろう」と尋ねることにした。この時，子どもたちは理由だけ聞くと，単に「もう手紙を書かない」とだけ判断すると予想されるため，「そうしたらどうなるだろう」と結果を考えることで，もう少し踏み込んだ考えを引き出せるように設定し直した。その後，資料の後半を読み，テレビで正一が書いた僕の

肖像画を観た後，「僕はどんな気持ちだっただろう」と尋ねる形に当初は設定したが，「その後，僕は正一にどんな手紙を書くだろう」と尋ねることにして道徳的行動に結び付けるよう設定し直した。展開後段では，『心のノート』の44頁を用いて，日常生活の友人関係を考えることとした。終末では，真の友情を育てることの大切さを説話し，友達と協力し合うことを週間目標とすることにした。

ＯＭ教諭

ＯＭ教諭は「心のししゅう」という小学校６年生の資料を用いて，正直について考える道徳授業を構想した。導入では，「正直に話せるとき」と「正直に話せないとき」を率直に話し合うことにした。資料では，主人公のまり子が刺しゅうを祖母に手伝ってもらったことを友人や先生に打ち明けるかどうかを道徳的問題として提示することにした。資料を分割するか全部提示するかで迷ったが，結局はＯＭ教諭の判断で全部を読み終えてから「正直に話す・話さない」の議論に向かうことにした。展開前段では，資料でまり子の心情を把握するように努め，展開後段で「正直に話す・話さない」の議論に入ることにした。当初はその理由と結果を尋ねることに設定したが，それだけでは物足りないため，もし話す場合には「誰（友達・先生・母親）に話すのか」「どのように話すか」をも具体的に考えることに設定し直した。こうして複数の選択肢を作った後に，「どれが一番いいか」を比較検討することにした。終末では，「正直に話す」という道徳的行為が「もし実行できると自己を向上させることになること」に気づかせるような説話をすることにした。授業後に「嘘やごまかしをせず，正直に話す」を週間目標に設定し，事後指導でどれだけ適切に実践できたかを評価し合うこととした。

(c) ２回目の研修日

本コースでは各研修教員が道徳授業の指導案を９月中に学校現場で実践して報告をまとめ，９月29日に設定した第２回目の研修で発表し合うことにした。そこでは道徳授業の指導案の他に，実際に用いたアンケート調査，ワークシート，心理テスト，事後調査なども提示し合い，授業の様子や効果も具体的に説明した。

実践報告によると，基本的には（b）で構想した指導案の通りに行ったようだが，中には当日の子どもたちの言動や反応を観察しながら発問の内容を柔軟に修正したという報告や，９月には運動会の練習が多くて事後指導を十分に行えなかったという報告もあった。また，道徳教育の中には即効性がないものもあるため，今後の子どもたちの成長過程を見守った上で事後報告をしたいという旨の発言もあった。

研究発表においては，概ね全員が今回の研修を好意的に受け止めており，最新の道徳教育を理解することがよい刺激になったという意見や，今後も学校現場で活用していきたいという抱負を述べる方が多かった。また，大学院進学を希望する意欲的な方もおり，具体的には従来の心情把握型の道徳授業と問題解決型の道徳授業の組み合わせ方を研究したいという方や問題解決を通した道徳性の発達段階を研究したいという方がいた。

## 2．今後の課題

本年度の研修は，基本的に昨年度と同様の実施要領で行ったが，いくつかの新しい課題が見出されたため，以下に記しておきたい。

まず，今年度は研修用のテキストや参考資料を事前に用意して一回目の研修日に配布したが，自宅研修でテキストや資料を熱心に読み込んで創造的に指導案を作成した方もいれば，逆にあまりテキストを読まないまま他者を模倣した指導案を作成した方もいたことである。例えば，ある教諭は子どもたちの発達状況や事前調査を綿密に行い，道徳授業の他に事後指導も組み合わせたため非常に充実した教育成果を上げたが，一方の模倣した指導案を作成した教諭は，最後までなかなか軌道修正できず，道徳授業でも中途半端になり苦心したようである。今後はテキストや資料を用意し，メールによる指導を施すだけでなく，研修教員が高い動機をもち，意欲的に取り組めるよう配慮する必要があると思われた。

次に，ある教諭は２回目の研修日が勤務校の校内研修と重なってしまい，午前中を欠席する事態に至ったことである。12年目研修は実施より数ヶ月前から日程が決定しているにもかかわらず，なぜこのような事態になったかは定かではないが，今後このようなことがないように事前に十分日程調整をする必要があるだろう。

第３に，ある教諭は事後指導で『水からの伝言』を道徳資料として用いたのだが，これは科学的に実証されていない内容であるため問題になったことである。近年，この本は道徳の資料として教育現場で広まっているのだが，道徳の時間に科学的論証のない知識を教えることに違和感があったため，授業では慎重な言動をするように促した。

第４に，１回目の研修で熱心に取り組んでいた教諭が，自宅研修で優れた指導案を作成したにもかかわらず，地元の教育委員会との関係で授業実践を止められそうになったことである。本来，大学の12年目研修と地域の教育委員会の研修とは別個に独立して行われるべきものであるが，この教諭は同一の道徳授業の指導案で両方の研修を兼ねようとしたため混乱が生じたようである。本コースのように，問題解決や道徳的実践を重視する教育方法と，従来のように心情の読み取りを重視する教育方法では，指導方針が異なるため齟齬が生じたと言える。結局，この教諭は自ら作成した問題解決型の道徳授業を実践できたのだが，当初より動機も意欲も低下してしまい，十分な成果を上げられなかったことは遺憾に思われた。

最後に，これは昨年度も指摘したことであるが，初日の研修で全体指導を１回行うだけでは教育内容の理解が不十分であったことである。もちろん自宅研修中にメールで講師から指導を受けることである程度は補足できるが，やはり理想的には個別指導の日をそれぞれ設定して，最低でも３日間の研修が必要ではないかと思われた。

## 3．今後の展望

12年目研修を担当して本年度で２年目になるが，研修教員の受け入れ態勢や指導方法はほぼ確立されたため，研修内容も充実してきたように思われる。特に，テキストとｅメールを用いた指導方法は利便性が高いため，本年度に行った教育経験を来年度以降にもぜひ生かしていきたい。

今後の展望としては，第１に，県や市町村の教育委員会とできるだけ連携をとることで，地域社会や学校現場に密着した道徳教育の開発と実践に取り組むことである。大学と教育委員会と学

校現場が連携し合うことで，12年目研修をより一貫した優れた指導体制に再構築することができると思われる。

第2に，大学の設置するAIMSをもっと有効に利用することで，eキャンパスを駆使して講師と研修教員，あるいは研修教員同士のコミュニケーションを活性化できるように配慮することである。研修日は実質的に2日しかないため，その間にある長期の自宅研修を充実させるためのシステムや方略をいろいろ検討していきたい。

第3に，研修の成果を大学紀要などに発表できるようにすることである。本年度は優秀な指導案を構想し実践した研修教員に執筆を勧めたが，本人が多忙を極めていたために論文掲載を見送ったが，できるだけ論文の形で公表して成果を残し，今後の波及効果を高めるようにしたい。

本コースが目指す道徳教育の開発と実践は，大学の研究者と現場の教員が信頼関係を築き，協調体制を整え，スパイラル上に相互成長を図ることによって実現するため，今後も連携を図りながら着実に実績を積み重ねていきたい。